【書籍紹介】

泉森皎著
『行基と歩く歴史の道』

籔　元晶

元奈良県立橿原考古学研究所副所長、同附属博物館館長の泉森皎先生は、今年喜寿を迎えられた。それを契機として出されたのが本書である。

「はしがき」には、泉森先生と考古学との出会いが書かれていて、大変興味深い。先生は堺のお生まれのようで、小学校高学年の頃には、百舌鳥古墳群を探検して回られたとのことである。中学ではさらに広い範囲に及んで、ますます歴史の興味を大きくされたという。そして、高校では、森浩一先生の教えを受けられ、発掘調査の時には末永雅雄先生にも出会われたとのことである。これほど考古学と深い縁で結ばれた人生というものがあるものかと感じずにはいられなかった。

先生は、「歩いて、見て、何にでも興味を持つ。それが私の考古学の原点である。」とおっしゃっている。このお言葉は、本書においても大いに感じられるところであり、そのことからこちらまでわくわくとさせていただきながら拝読することができた。

まず初めに、本書の構成を紹介しておきたい。

はしがき
第1章　大和と河内
1　二上山北麓　穴虫から逢坂・関屋の里を歩く
2　近つ飛鳥の里を歩く
3　羽曳野丘陵中央部を歩く
4　河内から摂津へ　中高野街道
第2章　行基の足跡を訪ねて
1　行基と和泉
2　行基と河内
3　行基と摂津猪名野・武庫・兵庫
4　行基と大和・その周辺
5　行基と土塔
第3章　行基の残影を求めて
1　南山城の古社寺と遺跡
2　巨椋池と宇治川流域の社寺と遺跡
3　京都伏見丘陵の古社寺と古墳
4　木幡と伏見・桃山丘陵を歩く
5　鳥羽・伏見の史跡を訪ねて
6　久御山町、山城三川の合流地と巨椋池南西岸
7　吉野川流域の社寺を訪ねて
8　南海道を歩く
第4章　アジアの仏塔と大野寺土塔

あとがきにかえて

それでは、章ごとに紹介していきたい。

第1章「大和と河内」は、二上山をはさんだ大和側と河内側の歴史探訪である。読み始めてすぐに感じたのは、泉森先生が実際に現地をよく歩いて書かれていることから、一緒にその風景を見ながら歩いているような気分になったことである。先生が隣におられて、一つ一つ指をさしながら説明をしてくださっているような錯覚におちいるほどであった。

二上山周辺は各種の道路が集中している所とされ、その中でも特に竹内街道・穴虫越え・伊勢街道の三つについて紹介されている。穴虫越えがゆるやかな峠道であることから、南河内との人と物の交流は主にここが利用されていたとされていて、かつての伊勢街道も穴虫越えであったと推定されている。

二上山の西側の近つ飛鳥に入ると、一挙に古墳が多くなる。それだけ、この土地がかつて重要な土地であるとともに大変栄えていたことがよく分かる。そこから北西に位置する羽曳野丘陵は、その東辺は古市古墳群で有名であるが、ここでは丘陵の中央部に注目しておられる。ここにも、葛井寺・仲哀天皇陵古墳・野中寺・峯ヶ塚古墳・黒姫山古墳などの遺跡が豊富にある。そして、中高野街道である。公式に認められたのは明治時代ということで意外であるが、江戸時代にはすでに高野街道と呼ばれていたようである。東高野街道や西高野街道ほど有名ではないことから、むしろ逆に泉森先生は注目をされている。平野の杭全神社・如願寺・瓜破遺跡・瓜破天神社・高野大橋、そして松原市の屯倉神社・阿保神社・柴籬神社など、この道が歴史的に重要であったことを知ることができる。

第2章「行基の足跡を訪ねて」では、和泉・河内・摂津・大和の地に残る、四十九院を中心とする行基の遺跡をくわしく探訪されている。その中で、「天平十三年記」に架橋六カ所、道路一カ所、池十五カ所、溝七カ所、樋三カ所、船息二カ所、堀四カ所、布施屋九カ所とあることに触れられて、治水事業が多くを占めていることを指摘されている。確かに、これらの事業が当時の民衆の願うところであったのだろうと思われた。

この章で私が特に興味を持ったのは、やはり自分が住む神戸と関係するところであった。新川運河の浚渫工事の際に発見された重量四トンの巨石二十数個は、奈良時代後半から平安時代中頃にかけて港の入口部の防波堤を築いた時の石材

で、三～四段積み上げ松杭で固定していたことが判明したとのことである。それについて、先生は、行基の船息院・船息尼院との関係を示唆されていて、大変興味深かった。

そして、先生が一番関心を持たれたのが、行基が造った大野寺の土塔である。現在は元の形に修復されていて、その写真が掲載されているが、私にとっては初めて見る不思議な建造物であった。類似の遺構が他に二つあるとのことであるが、逆に、日本では珍しいものであることがわかる。泉森先生は、土塔の傾斜角に注目されて、それが古墳と同じ施工法であることから、土師氏の伝統的技術によって造られたと推論されている。大野寺土塔が、土師氏の集落と須恵工人の村の中央に築かれていることからも、理解しやすい。そして、「行基の墓は生駒に築かれたが、この地の人々は土塔（仏塔）の性格を行基への追慕と信仰、さらに地域結集のシンボルとして築いたと思われる。」と論じられている。

第３章「行基の残影を求めて」では、木津川市から北上して、巨椋池周辺部を主に取り上げられている。巨椋池に人が住み着いたのは弥生前期から中期頃で、古墳時代には渡来系の陶質土器が出土することから、開拓には渡来系の技術が援用されたとみられるとしておられる。「巨椋池をめぐる社寺と遺跡」を拝読すると、『日本書紀』の栗隈大溝開削から『延喜式』に見える旦椋神社や巨椋神社があること、豊臣秀吉によって巨椋堤が築かれたこと、そして昭和初期の干拓事業と、古代から連綿と開拓が続けられてきたことがよく理解できた。

そして、考古学の知識を持たない私にとって驚きだったのは、伏見稲荷大社の「お山巡り」の峰々が前期古墳であったということである。それぞれが上社・中社・下社となっているとのことで、この考古学の成果をどうとらえたらよいのか、皆目見当がつかなかった。大きな謎である。

第４章「アジアの仏塔と大野寺土塔」では、大野寺の土塔のルーツを求めて、インドから東南アジアにかけて、広く仏教遺跡を踏査されている。まさに、「歩いて、見て、何にでも興味を持つ。」を実践されている。インドのサーンチー・アジャンター石窟・ブッダガヤー大塔、スリランカのミヒンタレーの寺院・アヌラーダプラ遺跡、ミャンマーのシュエジー仏塔・アーナンダ寺院・バカン五千坊の遺跡、カンボジアのアンコールワット・アンコールトム、インドネシアのボロブド

ウール・プランバナン寺院遺跡群などを紹介されている。そして、それらから仏塔の構造の変遷を見ておられる。いずれも大野寺土塔とは程遠いとされているが、新羅統一時代の積石塔が岡山県熊山遺跡の石塔に類似していることから、東南アジアの仏塔の流れを引くものと考えておられる。唐の義浄がインドネシアのパレムバングに滞在中に撰述した『南海奇帰内法伝』に、南海ルートを使った新羅僧二人が記されていることに注目されている。実際に多くの遺跡を見てこられたうえでの指摘であるだけに、傾聴すべきご意見である。

最後に、本書を読み終えて感じたことは、いつの間にか自然と考古学への興味を呼び起こされたことである。本来は難しいはずの事柄を、読み手に分かりやすく説明されていることによるのであろう。一度、本書を手にしながら現地を探索してみたいという、そういう気持ちでいっぱいになった。きっと楽しく豊かな歴史散歩ができることであろう。そして、泉森先生が一番おっしゃりたかったことは、「現地に行ってよく調査をしなさい。そこでよく見て考えなさい。それが、研究の出発点である。」ということではなかったかと私は感じている。これは、どの学問にも共通する重要なことだと思えた。

（法蔵館　二〇一八年十一月刊　二〇〇〇円＋税）

永澤正好著

『田辺竹治翁聞書　四万十川Ⅲ―ムラに生きる―』

嶺岡　美見

「翁の人生をのぞき見ればきらきらと輝く万華鏡のようだ」、本書の語り部である田辺竹治翁について著者はこのように表現する。

田辺竹治翁は、四万十川中流域に位置する高知県幡多郡大川筋村（現、四万十川市大川筋地区）に明治四十一年（一九〇八）に生まれた。翁は狩猟・河川漁労・農業に従事し、自然と共に生き、イエとムラの人間関係を大切にしてきた人物である。

著者と翁との出会いは、著者が大学一年生の頃、故和歌森太郎団長の宇和地帯の民俗調査にて故千葉徳爾先生の猪猟調